女人用心帖

多岐川恭

落丁・乱丁の場合は
お取りかえ致します

女人用心帖

昭和三十七年四月五日　発行 ©

定価　三百九十円

著作者　多岐川　恭

発行者　矢貴東司

印刷者　北山　茂

発行所　株式会社　桃源社

東京都中央区日本橋蠣殻町一ノ一二
電話（六七一）四〇〇一、二地
振替東京六四三五一番

女人用心帖・目次

へび　九
誘い　一九
お肌頂戴　三〇
秋の色草　四一
おとうと　五一
面影　六二
わな　七三
ひと芝居　八四
乗込み　九四
御舟　一〇五
倉のうちそと　一一六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

女三人　一二七
箱入り娘　一三八
蜂太郎捜し　一四九
奥方失踪　一六〇
殿様　一七一
飛んで火に入る　一八二
にが手　一九三
戦機　二〇四
逃げた魚　二一五
人質　二二六
おんな優勢　二三七

心変り　二四八
片口大膳　二五九
逆襲　二七〇
かたき　二八一
雑魚一匹　二九三
賢しうして　三〇三
漏れた水　三一四
勢ぞろい　三二五
夜へ　三三六
激突　三四七
露消えぬ　三五七

古巣へ　三六八
父と娘　三七九
あと仕末　三九〇
元の黙阿弥　四〇〇
去る者来る者　四一一

装幀　三井永一

女人用心帖

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

へび

一

横合いから、いきなりぶつかってきたのが、若い娘であった。
蜂太郎は、娘の手が彼の袖口から素早く入り、ふところへ回るのを感じた。同時に蜂太郎の手は、娘の黒繻子の帯をしっかりとつかんでいる。娘は「あ」と言った。
「粗相でございます。ご免下さいまし」
娘は手を抜いて、必死に逃れようとした。意外に強い力で、帯にかけた手は離された。
蜂太郎はそのまま見送る。
両国広小路の雑踏はいまが盛りだった。まぎれこむにはよいが、悪くすると壁になる。
四、五軒並んだ食物店の前で、小石につまずいてよろけたところを追ってきた若い男と、商人らしい中年の男が捕えた。
弥次馬が囲み始めた。蜂太郎もゆっくりと弥次馬の列の中に入る。
年は十八くらいか。きれいに島田に結った、やや下ぶくれの顔は、上品な美しさだ。黄八丈の両袖をつかまれ、あえいでいる。
「何をなさいます。人違いでございましょう」
若い男は、居合わせた町方の手先であろう。娘の見幕に押されて、中年の男を見た。
「いや、確かにこいつだ。義太夫の小屋の前で、突き当ってわたしの金入れを抜きゃがったのだ」
「そうかい。じゃあ調べてみるがいいや。さあどうなとしておくれ。いっそのこと、着物を脱ごうかねえ」
娘の口調はガラリと変っていた。
「そのかわり、若い娘が往来ではだかになろうてんだ。もしお前さんの財布が出なかったら、なんとかあいさつはあるんだろうね?」
そういう啖呵を切りながら、娘は鋭い目で、蜂太郎の顔を捜しているのだ。捜し当てると、ホッとした色が現われた。
娘の着物を、まさか剝ぐわけにはゆかない。三下は袖、ふところ、帯などをさぐって、苦い顔をした。よくある手だが、財布が出ぬ以上、どうしようもない。それに、女は中どころの商人の娘と言えばピッタリする押出しがある。素人臭さが、まがいものでないようだ。

すられた男が赤い顔になったのを汐に、蜂太郎は見物人の輪を離れた。
猿芝居、玉乗り、のぞき、軽業に寄席……並んだ小屋掛の興行に、呼込みの声がやかましい。織るような人波が続き、澄んだ秋の大気を濁している。
蜂太郎はそのうちの一つにぶらりと入った。蛇使い、富士太夫一座、彼は木戸御免だ。ことさら、ゆっくりした歩き様をしたわけである。狭苦しいむしろ囲い、下は土間。舞台では太夫の蛇使いが始まっているところであった。入りはあまりよくない。蜂太郎は丸太棒の柱によりかかった。
「お兄さん、済みませんね」
ほのかな脂粉の香と共に、待っていた声がした。

二

「お預けしたものを、返していただきましょうよ」
蜂太郎は、近々と寄せられた娘の顔を見た。
「お前さん、きれいな子だな。そんなにキツイ目の色をするもんじゃねえ」
「返しておくれってんだよ。お礼はあげるからさ」
「金か？　いまのところは間に合ってる。いらねえや」
蜂太郎はふくれたところをじらすように叩いてみせ、笑った。
「おや、気っ腑のいい人だねえ。そんならサッサと出してもらおうよ」
「おっと、そいつは待ってくれ。金はいらねえが、ちょいとそこいらまで付き合ってくれねえか。おれのほしい礼ってのはそれだ」
そう言いながら、蜂太郎は娘の二の腕をつかんだ。ちょいとつまんでいるだけのようだが、動かせばジーンと痛む。
「おいらにかかわり合ったのが運の尽きだと諦らめねえ。なあに、後くされはねえんだよ」
娘は唇を噛んだ。
急に木戸口が騒がしくなり、木戸番のあらがう声と、武士らしい二、三人の声が交錯した。それを聞くと、娘は手を振り離そうともがいて、悲鳴をあげかかった。
「いいよ、わかったよ。言う通りにするから、離して。わたしを追ってるやつが入ってくるんだよ！」
娘は早口でささやいた。顔色が変っていた。
「ふうん……何だかわからねえが、この中じゃあ、どうかくれたってだめだ。舞台の横を回って、幕が下ってるから、それから楽屋に入っていな。おいらの名は蜂太郎ってんだ。それまで財布は預かっとくぜ」
娘が楽屋へ消えるのと、三人の侍が小屋の中へ入るのと、ほとんど同時である。
蜂太郎は知らぬ顔で舞台を眺めた。
にぎやかな三味線のはやしと共に、舞台では年増の富士太夫の体に、数匹の蛇がまつわりつき、鎌首をもたげてふ

らふらと揺れていた。
水色の上下はうしろへはねのけられ、薄紫のかたびらは、太夫の胸元まではだかっている。一匹は白いのどを巻き、チロチロと赤い舌で、耳のあたりをなめていた。一匹は絞るように腰を一巻きして首をふくらんだ乳房のあたりに突込んでいた。また一匹は、あらわな二の腕を幾重にも巻いたうえ、首を肩のあたりまで伸ばしている。太夫は片方の腕をさしあげ、片手はうしろにつき、弓なりにのけぞって苦悶の様子をしている。見物は息を呑んで、その凄艶な光景を見守っていた。
侍たちは、舞台には見向きもせず、あわただしく見物人の中を縫い、娘がいないのを確かめると、急いで立ち去った。
はやしが止んだ。太夫は笑顔で身を起し、蛇たちはスルスルと解けて、前に置かれた黒塗りの箱の中へ吸いこまれた。

三

楽屋とは名ばかりで、荒むしろを敷いた狭い場所に、衣装や小道具が乱雑に投げ出され、一座の芸人たちが膝を突き合わせている。
蜂太郎が入ってみると、娘はコチコチになって、部屋の真中あたりに坐っているのだった。
「上玉だねえ。おぼこじゃねえか」
せむしの京吉が歯をむきながら言った。
「お前さんも、とんだ悪いやつにつかまったもんさ」
縄渡りのお稲が、娘を値踏みするように見ながら言った。
「この人はね、女と見れば行き当りばったりに物にしなけりゃあ済まない性分なのさ」
「いったい何だえ、その娘さんは」
疲れた声は、舞台を終えた富士太夫のものだ。
「あーあ、きょうも不入りだねえ」
富士太夫……本名おきんは、鏡台の前の古ぼけた朱色の座ぶとんに坐った。
「ねえ蜂太さん、この娘さんは何だって聞いてるのよ。妙だね、かたぎのようでもあり……」
蜂太郎は薄笑いで答えるだけだ。
「さあ、もう大丈夫だろう。でかけようぜ」
娘はすなおに立ち上って、一座の連中に「お邪魔さま」と言った。口のあたりに冷笑がただよう。
「太夫、こいつを借りるぜ」
と蜂太郎は、鏡台のそばに置いてある小さな手箱のようなものを取りあげた。
「またかい？　呆れた人だよ、かわいそうに」
おきんは眉を寄せたが、娘を見てニヤリと笑った。
蜂太郎は娘を連れて表へ出た。広小路のにぎわいに背を向けて、浅草御門から柳原土手にそって歩く。右側は丈高

い草の茂った土手に柳の並木が続く。左側は古物や薬などを売る屋台店の並びが途切れ、武家屋敷の塀、淋しい空地になった。人通りも目に見えて減った。
「おめえ、何て名だ？」
「お蝶」
と答えるのといっしょに、いつの間に握っていたのか、娘は鋭く光るものを、蜂太郎の目玉をめがけて突き出していた。
「わあっ」
と言ったが、蜂太郎は腰くだけの姿勢のまま、辛うじて攻撃を外らし、お蝶の利腕をつかんだ。
「危ねえ危ねえ。おいらはヤットウのほうはてんでいけねえんだ。おどかしっこなしだぜ」
それは銀かんざしだった。蜂太郎はお蝶の手からひったくると、元通りに髪の中にさしこんだ。
「左へ曲って、もうじきだ。きたねえところだが、隣近所はうるさくねえ。しんみりできるぜ、はっはっは」

四

連れこまれたのは、無住と見える寺だ。かつての境内と思われる草ぼうぼうの空地。草の間から、半分ほど瓦のずり落ちた本堂の屋根がのぞいている。
雀がつぶてのように、その屋根をかすめて草の中にかくれる。
「秋だなあ、お蝶さん」
蜂太郎はのんびりとそう言うが右手にはお蝶のしなやかな腰を抱きかかえている。
場所は町屋の外れで、空地の向うにポツンポツンと貧弱な一軒建てが散らばっている。
一方はずっと続く武家屋敷で、日ぐらしの声もめっきり弱くなった木立が続く。
本堂を素通りして、庫裡に上った。蜂太郎はお蝶の履物をキチンとそろえてやった。
部屋はささくれ畳の六畳で、調度はほとんどなく、荒れ放題だ。蜂太郎は出入口の戸と、本堂の廊下へ出る板戸につっかい棒をした。お蝶は目を吊りあげて蜂太郎を睨み、小刻みにふるえている。台所に格子窓が一つだけなので、室内は薄暗い。
「そう、しゃちこばっていることはないさ。お坐りよ」
蜂太郎は例の財布をふところから抜いて、お蝶の前に投げ出した。
「先に返しておくぜ。……そうだ、出がらしだが、お茶でもどうだね」
火鉢が一つ、その横に小さいちゃぶ台があって、何やらゴチャゴチャ置いてある。そこへ立って行こうとして背を向けると、お蝶がまた飛びかかってきた。蜂太郎の脇の下を、匕首が走り抜ける。お蝶は蜂太郎におんぶするかっこうになってしまった。

「茶はいらねえのか？　せっかちだなあ、おめえは」
と蜂太郎は笑いだした。
「色事はせいちゃあ味がねえよ。だが、コリコリして張りがあるようだなあ、おめえの体……どれどれ」
蜂太郎が手をまわして抱き寄せようとするのに、お蝶は悲鳴をあげて争った。ひょいとすかすと、衣紋を乱したまま、畳の上に倒れ、足を縮めた。
「お堅い人だね。おいらも嬉しけりゃあ、お前さんも嬉しくなることだぜ。お互に楽しんで、別れりゃあ他人同士だ。むずかしく考えるのは悪い了見だ。おいらは生娘には手を出さねえ。おめえはおぼこでもなし、堅気とも見えねえ。好いた男に心中立てか？　古いねえ」
「手を出せるもんなら、出してみるがいい」
お蝶が叫んだ。
「うん、そいつは楽しみだ。だが、できることなら無理をしたくはねえ。打ち解けてくれねえかなあ、もっと」
「だれが、お前なんかに！」
お蝶は猫のように起き上り、蒼い顔をゆがめた。

五

「おめえも、納得ずくとはゆかねえのか？　そうなると、どうしても承知させずには置かねえのが、因果な性分なんだ。助平とでも、何とでも言うがいいや」
蜂太郎はあきらめたように、楽屋から借りてきた黒い箱を引き寄せた。
「これは何だか知ってるかい、お蝶さん」
お蝶のふっくらした頰におびえが走った。
「底にはたくさん小穴があいてるんだ。息がつまるといけねえからな」
お蝶はジリジリとあとずさりを始めた。円らな目が一杯に見開かれている。蜂太郎は箱の蓋を細目にあけた。シュッという音で、土色の長いものが、ほんの少し外に現われた。蝮（まむし）であった。
「ヒェッ」
お蝶は両手を伸ばし、泳ぐような所作をした。蜂太郎は更に少し、蓋をゆるめた。
「こんなことはしたくねえが、手荒な真似よりはマシだろうと思ってね」
「やめて、やめて……」
お蝶はもう裾の乱れも構わずに、一方の壁にしがみついていた。
「言うことを聞くからさ……早くヘビを……ヘビを……」
ガタリと蓋を落すと、ただの黒い小箱だ。
お蝶はおとなしくなった。
「おめえは妙な女だよ。さすがのおいらも、正体がつかめねえ」
蜂太郎は、お蝶の汗でしっとりした背中をさすりながら

言った。お蝶はぐったりして、豊かな乳房がまだ波打って、蜂太郎の胸を押してくる。目を閉じているが、お蝶の手も蜂太郎の首に巻かれていた。
「平打ちのかんざし、次は匕首ときやがる。ウッカリした野郎ならズブリだ。あれは心得がなくちゃあできねえ」
　蜂太郎はお蝶のすべっこい脇腹からくびれた腰のあたりをつかんだ。
「それに、おめえの体はまだ、生娘と言ってもいいようなもんだ。生娘にもいろいろあるが、裏長屋の育ちじゃねえようだし、それでスリとは恐れ入ったな。手口はまだ未熟だったぜ」
　お蝶の腹部がふるえ出したのは笑いをかみ殺しているのであった。
「お前……お前さんこそ、得体が知れないじゃないか、ヤットウができないなんて、大嘘さ」
「いや、おいらの身元調べは勘弁してもらおうじゃねえか。おいらはただのつまらねえ女盗っ人さ。機嫌が直ったようだな?」
　答える代りに、お蝶は身を寄せてきた。甘い呼吸と髪油の匂いが、蜂太郎を包んだ。彼は手に力をこめていった。
　やがて、蜂太郎の枕元で、お蝶は身仕舞をした。
「眠くなってきたから、おれは一眠りする。送らねえぜ。達者で暮しな、お蝶さん」
目を閉じたまま蜂太郎がつぶやいた。

六

「これ、起きろ。もう朝だぞ」
　声といっしょに、枕が乱暴に蹴られる。蜂太郎は寝ぼけまなこのまま、目の前に突き出された足を引張った。家鳴り震動して、尻もちをついたのは僧形の男だった。
「ああよく寝た。朝か……」
　朝ではない。破れ行燈に火がついていた。どうやって廊下から室内のつっかい棒を外したのかわからないが、この坊主が入ってきて行燈をともしてくれたのだ。
　四方から聞える虫の音が、波のようだ。蜂太郎はまたふとんに長くなった。
「なまぐさいぞ」
　あぐらをかいた坊主が鼻をうごめかして言った。それはダルマのような男で、頭はつるつるだが、顔の下半分はひげにおおわれている。よほど毛深いたちで、剃るのが間に合わないのだろう。汚れほうだいの白衣の前をはだけている。
「また連れこんだな。どんな女だ?」
「スリさ」
「スリだと?　お前にも似合わぬ。大味な年増だったろう?」
「それが、そうじゃねえんだ。生娘同様の生きのいい子だったよ。こいつを見せるまでは」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com